



Assisted Reproductive Technology in Poland

ポーランドの生殖補助医療

Interviewee

Dr. Magdalena Radkowska-Walkowicz

Q. 専門分野やこれまでのキャリアについて簡単に教えてください。

2007年よりワルシャワ大学民族学・人類学研究所の准教授をしている。2023年10月現在、スコットランドのエディンバラ大学の客員研究員。ポーランド科学アカデミー生命倫理委員会の委員でもある。

医療人類学とその隣接分野で研究を行っている。医療人類学に関する論文を多数執筆し、生殖補助医療に関する人々の経験に関する著書もある。女性の不妊症の原因となるターナー症候群に関する研究も行っている。現在は、もうひとつの遺伝性疾患である先天性副腎過形成について研究している。

Q. これまでに生殖補助医療に関して行なった研究について、研究の目的や方法と得られた結果について簡単に教えてください。

2007年からARTの研究を行っている。当時、ポーランド社会では体外受精をめぐる議論が白熱していて、保健大臣が体外受精に国から補助金を出したいと表明していた。その頃、ポーランドにおける体外受精をめぐる議論と不妊体験に焦点を当てた。しかし、最も重要だったのは、不妊に悩む人々、特に女性に話を聞くことだった。2013年、ARTの実体験を記した本を出版した。

今年初め、同僚たちと共同で、子供の視点からARTを研究する学際的研究テーマ「子ども学」を立ち上げた。ポーラン

ドにおいて、体外受精で生まれた子供たちの状況とは? という問いを立てた。その結果、この研究はポーランドの体外受精が置かれた不当な状況の中に位置づけられることになった。体外受精は、政治家、カトリック教会、聖職者などから公然と批判されている。また、ポーランドの体外受精に関するメディアの言説は、これらの子供たちにどのような影響を与えているのか? という問いも分析している。つまり、「IVF children」とは何なのか、ポーランドでIVFによって生まれることは、子供たちのアイデンティティ感覚にどのような影響を与えるのか、ということである。それは、生物学的な観点ではなく、心理学的な観点からのものである。

この研究の一貫として、子供たちと直接、話をしている。医学的な観点からではなく、社会的、文化的な観点に焦点を当てている。子供たちは、自分が体外受精で生まれたことをすでに知っていて、体外受精について活発に議論されている家庭（たとえば、両親が体外受精推進派の活動家グループのメンバーであるなど）の子供たちとだけつきあう。その結果、インタビューに応じた子供たちは、一般住民を代表する集団ではない。これまでのところ、10歳にも満たない子供たちが、ポーランドの体外受精に対する不当な見解を間違いなく認識している。

Q. これまでフィールドワークをする中で、難しいと感じたことや倫理的なジレンマはありましたか? 女性研究者であることのメリットとデメリットは?

研究テーマによって異なる。不妊に悩む人々に話を聞いたことがあった。それは、彼/彼女らのメンタルヘルスに直結していた。彼/彼女らにとって、話を聞いてもらうことが重要だと考えた。彼/彼女らは医学的な側面だけでなく、感情的な影響についても語り、しばしば涙を流し



た。親になろうとして苦勞したことを思い出す人もいれば、まだ親になっていない人もいて、難しい、親密な会話となった。また、必ずしもインタビュー対象者ではない他の人々（例えば、インタビュー対象者の不妊パートナーなど）への影響にも気を配る必要があった。

同僚とともに、子供の安全を考慮した上で、子供と関わる際の実践規範を作成した。直面したジレンマは、他の人類学的研究や民族誌的研究と同じ。このトピックは本質的にデリケートだ。

女性研究者であることに関して、女性であるという共通体験があるため、また、自分自身も不妊の期間を経験しているため、女性と関わるのが比較的容易であると感じた。男性たちと話すとき、まるで女友達のように接してくれるので、女性であることの利点も感じた。男性にとって、不妊について話すなら、他の男性よりも女性の方がいいという感じだった。

Q. これまでのフィールドワークで出会った人物や場面で印象深かったものを教えてください。

たくさんの人々や状況があり、その多くが心を動かされるものだった。特に、妊娠に失敗した話が多かった。

体外受精で生まれたことを知っている10歳前後の子供たちを集めてフォーカス・グループをやった経験がある。同僚との共同研究で、子供たちに語りかけ、紙芝居や絵、積み木などさまざまな方法で会話を引き出した。子供たちに積み木を使って何かを用意するように頼むと、子供たちはブロックを使って体外受精の風景を作った。ブロックには人物の形もあるので、体外受精の風景の中でその人物がどんな役割を果たしているかを子供たちに尋ねた。子供たちはカトリックの司祭に役割を与えた。司祭が、体外受精は悪いことだと言っていると語ったのは

印象的だった。これは非常にユーモラスに付け加えられたものだったが、ポーランドの体外受精の議論におけるカトリック教会の影響力と、公的なメッセージが子供たちに与える影響を示していた。例えば、カトリック教会はIVFの子供たちを「フランケンシュタインの子供たち」と呼んでいた。

Q. ポーランド政府のIVFに対する態度は？

数カ月前に国会議員選挙があった。それまでの8年間、この国は非常に保守的な右翼政党によって統治されていたが、選挙で与党が敗北し、その後、新しい連立政権が誕生した。連立政権は、その政策的立場と経済的方向性を示す文書を発表し、その中で、体外受精の助成を行い、不妊カップルを支援することを約束した。これは非常に重要でインパクトのある変化であり、政府が体外受精とARTに対してよりリベラルなアプローチを採用し、それを貫くことを期待している。

現在、体外受精は公的医療保険の対象外である。1992年から2012年までは、すべての体外受精の費用は患者が全額自己負担していた。2012年には、体外受精（ART）に対する国庫負担が導入されたが、この法律は、2年後には与党によって廃止されてしまった。新しい首相による最初の決定は、体外受精の国庫負担制度を廃止することだった。

この時代、地方自治体が地元住民を対象に体外受精の一部助成を開始した。現在では、ポーランド全土で約30の都市が住民に助成金を支給している（特定の治療に限定され、居住条件を満たす人のみが対象）。

Q. ポーランドで third party reproduction は商業化されていますか？ 外国人患者は来ていますか？



ポーランドの法律では、精子や卵子の提供は完全に匿名でなければならない。提供された配偶子は、結婚しているか、もし未婚の場合、男性側が子供の法的・経済的責任を全て負うと正式に宣言している異性カップルのみが使用することができる。そのため、ポーランドはゲイやレズビアン患者にとって理想的な目的地ではない。

ポーランドには約 50 の IVF クリニックがある。一般的に、これらのクリニックは質の高い治療を提供することで評判が高い。体外受精のために海外からポーランドに渡航する場合、他国に比べて治療費が安いと、経済的な理由で渡航することが多いだろう。ポーランドのクリニックの中には、外国人患者を惹きつけるために、ホームページを英語に翻訳しているところもある。しかし、ほとんどの外国人患者は、法律や規制がより自由なチェコ共和国で治療を受けることを希望するだろう。

Q. 外国人がポーランドで「第三者が関わる生殖技術」などを受けにやってくることに對する、政府、教会、一般の人々、人権団体などに対する態度は？

公的な言説は体外受精の資金調達に集中する傾向があり、政治的な言説は体外受精にアクセスできるかどうか集中する。異性婚カップルに焦点が当てられているため、より高度な技術について議論する余地はあまりない。

ポーランドのカトリック教会とポーランド政府は、第三者による生殖やすべての体外受精に厳しく反対している。

ポーランドのカップルが ART サービスを求める場合、チェコ共和国が最も人気のある目的地になると予測している。これは中絶に関しても同じで、ポーランドの中絶法はヨーロッパで最も保守的だから。

Q. 子宮移植についてどのような議論がなされていますか。

このことについての公的な議論はない。実践されておらず、医学的実験とみなされている。非常に高額になることは避けられない。ポーランドでは現在、このような処置を行おうとする医師はいない。

Q. 代理出産についてはどうでしょうか？

現在ポーランドでは代理出産は禁止されている。法律上、実の母親が子供の母親となるため、代理出産は法律上、またロジスティック上、多くの問題を引き起こすことになる。

代理出産はこれまでポーランドで議論になったことはない。過去には、非公式な合意に基づいて代理出産が行われたケースもあったかもしれない。ポーランドのクリニックのほとんどがそのようなリスクを取りたがらないため、このようなケースは非常にまれだと思われる。

ウクライナ紛争以前は、ポーランドのカップルが代理出産を希望する場合、ウクライナに渡航することがほとんどだった。

Q. 現地のフェミニストは体外受精や第三者が関わる生殖技術について何か言っていますか？

ポーランドのフェミニスト・グループは現在、基本的なリプロダクティブ・ライツを獲得することに重点を置いている。彼女らは、世界の他の地域のフェミニストのように体外受精に批判的ではない。一部のフェミニストは、独身女性や同性カップルのための ART への平等なアクセスを要求しているが、これはポーランドにおける基本的なリプロダクティブ・ライツを達成するためには、二次的なものでしかない。



Q. 生殖補助医療で生まれた子供の福祉や権利について何か議論はありますか？ 発言している当事者などは？

カトリック教会は体外受精やその他の人工授精を非難している。ポーランドの聖職者たちは、胚は一人の人間として扱われなければならない、体外受精には「完全性(integrity)」が欠けていると強調している。教会は、体外受精は非有機的な受胎であり、「実験的」な科学的産物に近く、道徳的に容認できないという。これは「生命の権利」論や中絶に対する保守的な態度と密接に結びついている。その結果、教会は、体外受精は反・「生命の権利」であり、「自然な」方法で妊娠する子供の権利に反するものだと考えている。

一部の団体からは既知のドナー(known donor)を求める声もあるが、自分は調査を通じて、多くの医師が既知のドナーに反対していることを知っている。ポーランドの医学界から見れば、既知のドナーは悪いこと。これは患者の視点とは異なる。

体外受精で生まれた子供が児童福祉に関する議論に参加することは非常に稀なこと。子供たちは、語られるだけで、共に語る存在ではない。

Q. カトリックの影響力は政治の世界にもかなり及んでいますか？ 不妊のカップルはカトリック教会の公式見解に従っていますか？

カトリック教会はポーランドで大きな影響力を持っており、政治的な議論にも絡んでいる。

カトリック教会がARTに反対しているにもかかわらず、ポーランド社会ではARTが広く支持されている。ポーランドでは75%以上の人々がARTの使用を受け入れている。ほとんどのポーランド人はカトリック教徒だが、他方では世俗化と自由化が進んでいる。もちろん、カトリック

教徒でも子供を望む人は体外受精を行う。

Q. 受精卵は凍結保存されますか。余った受精卵はどのように扱われますか？

ポーランドにはクライオバンクがある。法律では胚の破壊を禁じている。すべての胚を保存し、移植可能なものはすべて子宮に移植しなければならない。その結果、一度に作製できる胚は最大6個まで。

また、科学研究のために胚を使用することも禁じられている。胚を提供することは可能だが、匿名に限る。この法律では、凍結保存して20年経てば、残った胚は遺伝上の両親の合意や同意なしに異性カップルに移植することができると定めている。この法律は2015年に導入されたが、とても奇妙で愚かだと思う。

Q. 受精卵提供に対するポーランドのカトリック教会の考えは？ 行われていますか？

カトリック教会はすべての体外受精に反対しているので、デフォルトでは胚提供にも反対。余剰胚をどうするかについて、より洗練された議論をしているカトリックの理論家たちは、胚を破棄するよりも他の女性に移植の方がよいと主張するかもしれないし、余剰胚は単に凍結しておくべきだと主張するかもしれない。

最後のコメント

現在、希少な遺伝病を持つ子供たちの経験を研究することに興味を持っている。生殖能力に影響を及ぼす希少遺伝病(ターナー症候群など)に苦しむ患者にARTの知識を広めることに関心を持っている。

(2023年11月)



Dr. Magdalena Radkowska-Walkowicz

現在、ワルシャワ大学民族学・人類学研究所の准教授として勤務している。スコットランドのエディンバラ大学の客員研究員。ポーランド科学アカデミー生命倫理委員会の委員でもある。

1999年、ワルシャワ大学民族学・文化人類学修士号。2005年にポーランド科学アカデミー哲学・社会学研究所社会調査大学院で社会学博士号を取得。

専門分野は、医療人類学とその隣接分野である。

論文

Radkowska-Walkowicz M, Maciejewska-Mroczek E. 2023 'Should I Buy Her a Doll'? Motherhood and Turner Syndrome in Poland. *Med Anthropol* 42(2):177-190.

Radkowska-Walkowicz M. 2018 How the Political Becomes Private: In Vitro Fertilization and the Catholic Church in Poland. *J Relig Health* 57(3):979-993.

Radkowska-Walkowicz M. 2012 The creation of "monsters": the discourse of opposition to in vitro fertilization in Poland. *Reprod Health Matters* 20(40):30-7.